

光明主義綱要

笹本戒浄上人

序 説

南無阿弥陀仏 十念

いまさら申しあげますまでもなく、弁栄聖者が御体験によつてお示しおきくださった、「光明礼拝儀」一部をひとわりお話しいたしませば、光明主義なるものが明らかにされます。しかし直接書物によつてこれを窺^{うかが}うのには、聖者の御講話の筆録で、田中木又先生が御編輯くださった「人生の帰趣」、その他の御遺稿集「光明の生活」「無辺光」等が結構であります。最も簡明にお書き残しくださったものは「安心問答」（ミオヤの光第二号第二巻所載）であります。したがつて光明主義の主義綱要を知らんと欲するかたがたは、この「安心問答」を主とし、前述の「人生の帰趣」「光明の生活」「無辺光」等を註解としてお読みになりますのがよろしゅうございます。それでただ今は、この「安心問答」の更に肝要なる点をごくかい摘んで

お話し申しあげようと思ひます。

光明主義の宗教的位置

それに先だつて、まず光明主義の宗教的位置について簡単に申しあげようございます。広く世界に行なわれております宗教を階級別にいたしますと、そのいわば最低級のものゝ「現世教」でありまして、それはただ現世の幸福のみを求むるいわゆる自然教であつて、はなはだ近視眼的宗教と云うべきであります。次に未来教は、現在なるものは、すべて前世の酬いとしてうけてゐるものゆゑ、この現世において幸福など獲得することはできぬ、したがつて未来に幸福を求むると云う、いわゆる「超自然教」であつて、前の近視眼的なるに對しては遠視眼的宗教と云うべきものであります。

しかしこの方が前者よりは一歩進んだものと言ふことができます。しかして今申しあげます光明主義は最も發達せる「円具教」すなわち円満具徳教であります。そして、これこそ最高級の宗教と申すことができます。すなわち、円具教とは、現在から永遠に通ずる理想と、これを實現すべき道を説いてゐるものであります。よく御承知のとおり、釈尊は一面大哲人でましましたと同時に大宗教育家であらせられました。そして、釈尊が大哲人としてお説きくださった経

文は沢山にあり、その經によつて建設された宗旨が日本にも多数あります。法相宗、真言宗、天台宗、禪宗のごときがすなわちこれであります。また、大宗教家としての釈尊がお説きくださった經文と、これによつて立つた浄土宗、真宗のごとき宗旨もございます。しかして光明主義において、正しく釈尊の全徳全人格が統一的に顯わされているのであります。由来哲學的宗教は、哲學本来の性質が分析、抽象でありますゆゑ、これに屬する宗旨では、如来の全徳すなわち四智の中のいづれかをとつて当面の理想としてゐるわけでありまして、たとえば法相宗、天台宗のごときは如来様の大円鏡智を、禪宗は平等性智を、華嚴宗、真言宗等は妙觀察智をそれぞれ理想としております。しかるに光明主義は、如来の全人格に憧憬し、また一挙にしてその全徳をいただく道であります。

したがつて前述の禪宗のごときは、その理想実現の過程において正しく坐禪するとき、その心の中に人格的の本尊を仰ぐと言ふようなことがありませんが、光明主義は正しくその理想実現の道を履んでいるとき、必ず如来の大慈悲の靈体を心本尊として勧請し奉るのであります。ただしその大慈悲の靈体は、この肉眼をもつて見奉られると言ふのではありませんが、初めはただ聖者の御教えを聞いて、そのような慈悲の如来現在したまい、一心に南無阿彌陀仏南無阿彌陀仏するとき、現にわれらの面前に応現したまうと説かるところを信じ、その大慈悲の攝

化を仰いで念仏するのであります。

普通、世間で「宗教」と言っておりますのは、英語のレリジョン (religion) の翻訳語であります。これはもとラテン語のレリガーレ (religare) なる「結びつける、合一する」と言う意味の動詞から発したのであって、また事実の真相から言っても「神人合一」と訳すべきでしたがってレリジョンを宗教と言うのは適訳とは申されません。しかし、それはとにかくとして、真の宗教は、必ずその心の中に神格を仰ぐべきものであります。

本 説

光明主義の理想は光明生活にあり

さて本説に入りまして、光明主義の理想は何かと言うに、それは申すまでもなく「光明生活」にあります。私共が一心に如来を念ずると、如来の光明が我々の心にただける、すなわち光明獲得と言う事実がある。この如来の光明がただけて、我々の心のものとなる、この事実を神人合一と言ひ、古来仏教ではこれを名づくるに生仏一致、仏凡不二、理智不二、念仏三

味等と呼んでおります。

しからばその光明とは果たしていかなるものか。それは電燈の光のごときものか、あるいはろうそく、太陽の光のごときものであるか。如来の光明は、前にもちよつと申しましたように、この肉眼に見奉らるべきようなものではありません。しかしそれは私共念仏するものの心に触れてくださいます。たとえば寒いとき火にあたると、その火の熱が我々の身体に触れてわがものとなる、すなわち自分があたたくくなるようなものであります。このところを弁榮聖者は、常々炭と火の譬喩をもつてお示しく下さいました。それは、炭には火が燃え移ると言う事実がある。しかし一度炭に火が燃え移ったとき、炭と火とは全く一つになり、もう炭はもとの炭でなくなる。しかし両者を離しておいたのでは、炭はいつまでも炭、火もまたそのままであります。ちようどそのように、如来の慈光を赤い熱した火にたとえて申すと、我々凡夫の心は眞つ黒い冷たい炭のような状態であります。この両者が離れたままでは、いつまでも炭は炭のままでありますが、私共が如来の慈光を仰いで一心に念仏いたしますと、それはあたかも火に炭を密接せしめているようなものでありまして、そのとき、向うのあたたくい結構な慈悲の火が、私共の醜い冷酷な、ともすれば悲観に陥りやすい心に燃え移つてくださる。すなわち如来の尊いみ心がただけて、徐々にわがものとなつてくる。こうなると、我々の心は明る

い、あたたかい、結構なものときせていただけ。かくのごとく、一心に念仏して得られる生活が光明生活であります。これにたいして、私共生来の生活は「暗黒生活」であります。すなわち心が暗黒なために、宇宙の真理、人生の真意義が分りません。ただ先祖より伝来の肉欲、我欲の生活を続けております。肉体あるがために愛欲の奴隷となったり、あるいは我欲あるがために名利の奴隷となったりいたします。よく選挙のときなど一つ当選したいと思うと、平生は人を眼下に睥睨する（へいげい）ような恰好でいたものが、今度は俄かにペコペコと人前に頭を下げて歩く、どうもさもない限りであります。

人から悪口雑言を言われると、むかむか腹が立つ、なぐる、けんかになる。あるいはややともすれば世をのろい、人をねたむ、誘惑に打ち負かされる、等々。まことに、私共は口にこそ万物の靈長だなどは申しながら、はなはだ浅ましい不完全きわまる一面があるのであります。

しかるに私共一心に念仏して如来の光明をしつかりといただき、すなわち光明の生活が得られたとき、初めて人生の真意義が分かり、その寿命においては実に永遠、情はすなわち常恒に平和、そして無限向上の成仏道の生活が始まるのであります。

もうこうなりますと、以前と異なり、心機一転して、たとえば人から悪口を言われても腹が

立つどころではありません。却つて「自分では気がつかなかった自らの欠点を、こうして親切に人様が教えてくださるのだ。お蔭でこの点を改めることができありがたい」と、理屈ではなく自然に心には感謝して聞くことができるようになります。万事かくのごとくなるので、自然この世に仇敵や鬼がなくなつて行くのが事実であります。あるいは事業に失敗などしても、決してそのためにくじけない。「この失敗は他日必ず自分を玉にするゆえんのものである」と頂いて一層使命に向つて精進いたすようにならせていただけます。しかして、これらのことは私共の先賢並びにここに居られます皆様のご多くのかたがたが、すでに実際に経験していられます事実によつて確信することができます。また、まだそうなつていられませんかたがたも、一心に念仏なさいませば必ず光明の生活が得られ、その向上の極致にはついに成仏することがおできになること、これまた少しも疑う余地はありません。現に私共は仏性を有する仏子、如来は私共の真実の親様であります。世間でも豚の子は発達の極には親豚となり、みみずの子もまた生長の極はついに親みみずと同じものになります。私共が一心に念仏して、仏性が開発靈化の窮極においてついに成仏することも、また実に宇宙自然の道理なのであります。

往生極樂の意味

次に一般のかたがたの中に、あるいは一応問題となるかと考えられます事は、古来から申します「往生極樂」と言う事実の意味であります。これについて「安心問答」には「極樂とは別名を無量光明土と言う」とあります。されば、極樂往生と光明生活とは全く同一事実であることとを、弁榮聖者はまた常々お示しく下さいました。申すまでもなく、私共がひとえに弁榮聖者を師と仰ぎますのは、聖者が全く真の体験のかたでましましたからであります、御同様に聖者のこの御体験、御人格を通じてその御教示を仰信し奉りたいものであります。

次にまた、しからば光明生活は現在より得られるか、あるいは未来に属するか。このことももちろん皆様においては、事実御体験なさったところによつて何ら疑問をさしはさまれる余地はないと信じますが、やはりこれも一応は問題となることがありますので、一言申し添えておきとうございます。

そういたしますと、仏教ではまず涅槃を理想といたします。法然上人が御書物を通じて師とお仰ぎなされた三昧発得の善導大師が、この涅槃を「永生樂果」とお釈きとしく下さいました。永生ですから永遠の生命、またこれに伴う樂ですから常恒の平和であります、弁榮聖者はよく

この涅槃の語のかたわらに「いきどおしのいのち」と仮名を振ってお示しになりました。更に涅槃には有^あ余涅槃と無余涅槃とがあつて、私共の心にこの涅槃が得られても、まだ昔からの煩惱の酬いとしてうけた肉体がある間、つまり余りもの有るのを有余涅槃、しかしてその涅槃が得られていれば、この肉体の死と同時に涅槃のみとなり切り、昔からの余りものたりし肉体亡^なざるがゆえに、これを無余涅槃と言います。あるいは弁^{べん}栄^{えい}聖^{せい}者は前者を精神的往生、後者を肉体的往生とも名づけられました。

由来往生と言うのは、梵語のプラティヤジャーヤティー (pratyajāyate) のことでありましてこの語は本来状態の変化を意味し、普通に「往き生まるる」と言うごとき場所がえの義ではありません(荻原雲来博士による)。ゆえに往生とは心的更生であり、したがつて有^あ余涅槃なることのあり得べきはこの意味においても明らかであります。

念仏者と病氣

よく念仏すれば病氣にかからなくなるのだなどと申さるるかたもありますが、それは誤りであります。たとえ一心に念仏して心にしつかりと涅槃(心的更生)を得ても有^あ余である間はやはり生理的制約をうけて、寒いときに着添えずにいればかせもひきます、夏は暑うございま

す。また不養生すれば病氣にもなりましよう。しかし有難いことに心はずでに常恒の平和を得ていますので、昔のごとくそれら四苦八苦のために、その心が悩まされることがありません。かくしてその一生を終るとき、それまで内部的に実現せられおろし涅槃が全体的に実現せらるることとなるのであります。昨日まで実現せられおろし余りもの、すなわち五官の世界が全く亡じ、今日よりは無余の涅槃界が実現せらるることになるのであります。しかしまたここに誤解してならないことは、もしこの心に涅槃が得られたら、もうこの肉体は余りもので役に立たぬ、あるいは不必要なものとなりはしないか。けれど、決してそうではありません。この人生は実にこの涅槃すなわち永生樂果を得ることが理想であります。一度これを得た上は、更にその光明生活の内容を充実していただく、すなわち次に申します救我から度我への修行のために、この身体は一層大切なものとなってまいります。要するところ「光明生活」は精神の事実であつて、決して未来にのみ期すべきものでなく「現在より実現せらるべき生活」であります。更に、もう少し「光明生活の内容」についてお話し申しあげようございます。

救我と度我の願い

そういたしますと、私共が御同様に称えております南無阿弥陀仏の「南無」の語には救我、

度我の二願を含む、と聖者がよく教えてくださいました。初めの救我とは言うまでもなく「我を救い給え」との願いでありまして、言い換えれば「最幸福を得しめ給え」と言う意であります。したがって一心に念仏してこの願いがかなえられたとき、すなわち光明生活にしっかりと第一歩を踏み入れるようになりますと、実に思えば思えば幸福なるを覚えます。これで初めて人と生まれしかいがあつたと感ぜらるるに至ります。もしこの人生において、この光明生活が得られなかつたとすれば、私共にはいつか必ず不満を感じるにいたるときが間違ひなくやつてまいります。この人生の第一義と考へて、あるいは金を山ほど積み、あるいは学問研究に没頭し、また芸術の世界に逍遙する等の道がありますけれど、いつまでこれらの道を楽しみうることでありましょうか。長きは七、八十年ないし明日をも知れぬ命に、無常の風ひとたび吹きくるとき、もう私共は一切合切を捨て置いて墓の主とならなくてはならないようになります。どうもそれを考へたとき、この人生ははなはだ不可解なものと言わざるをえなくなる。夜の寝ざめにも金もうけの道を考へ、おいしいものもろくろく食はず、營々孜々として働く、とどのつまりはすべてに未練を残しつつ淋しく死んでゆかなくてはならない。死ぬと言ふことほど確かなことはありません。そして今申しましたように、かかる死などと言う不完全のある間、この人生は徹底した喜び、満足の得られないのが現実であります。しかるをもし私共この不完全

な状態にあきたらず是非とも光明生活を得たいと願って一心に念仏し、しつかりと如来の慈光を蒙るに至れば、そのとき初めて永遠不死の真実の自己に目ざめ、実に歡天喜地、平和と喜悅よろこびとに満たさるるようにならせていただけるのであります。もうそうなつてからは決して四苦八苦にも悩まされず、八風のためにも動ぜられることのない、真に自覚ある生活に邁進しうるようにならせていただきます。しかしかくのごとく知情的に満足が得らるるに至つても、更に意志的あるいは人格的に完成しなくては真に完全なる満足は得られません。ここにこれらすべての要求を満たし、私共の人格的要素の全部を満足していただきたいと言ふ願いが必然的に起こつてまいります。これすなわち次の度、我の願ひであります「我を度し給え」とは最高徳（菩提）への欲求であります。そしてこの願望が満たされたとき、ついに私共は成仏させていただきます。こののであります、すなわち自覚、覚他、覚行窮満の果が実現せられることとなります。これを要するに私共一心に念仏して光明生活が得られた暁には、その心にしつかりと永生樂果を得、如来の聖意まことをわが心として活動させていただき、たとえ一朝一夕ではないにしても、ついには如来の世嗣たるべき靈格を完成させていただくに至るのであります。

理想を実現すべき念仏の修行法

次にしからばこの理想を実現すべき「念仏」はいかように申したらよいでありましようか。もちろん念仏の修行法も、その念仏者が一年級であるかないし二三年級等であるかによつて、それぞれ進みがあります。しかし今はまず主に初年級の修行法について申しあげようございませぬ。しかしここにきわめて大切なことは、私共が修行を起こします際には、まず真の善知識によつて指導を受けなくてはなりません。そしてそのためには、私ごとき者の説教をお聞きくださいませぬよりも、事実すでに光明生活を得られしかたがたのお願ちくださいませぬ御話の方が真に結構なのであります。けれどただ今は私が弁榮聖者からいただきましたままをお伝え申させていただきます。

そういたしますと、まず私共は前にしばしば述べましたとおり、全く現在のこのままではいかんともすることのできない哀れな凡夫であります。しかるに如来すなわち阿弥陀仏は宇宙一切のものの真実大本の「ウミノミオヤ、スクイノミオヤ、オシエノミオヤ」にてまします。この大慈大悲の親様は「わが名を呼んで我を慕い頼めよ、しからば必ず光明中の人とならん」とのたまう。われら衆生はただ素直にこれを仰ぎ信じ、一心に阿弥陀仏とみ名を呼び奉り、南無とおすがりいたし、すなわち南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と一心にお念仏いたします。如来は無碍自在にして一切処にましますば、かく私共がいやしくも念仏するとき、親様は必ず私共の

真正面にましまして、尊いみ光をもつて私共をお照らしくください、また御護念りくださいます。で、私共のこの念仏する心が次第に一心となつてきて、真に統一せらるるに至つたとき、しつかりとそのお光明を心にいただき、光明生活に入ることができるのであります。そしてこのため、ことにこの一心にやると言うことが、きわめて大切であります。かく、私共が是非とも御救済に預りたいと願つて日々夜々念仏いたしますと、ついに永遠の生命に目ざめ、ここにもまず仏道修行の初歩たる五根五力を成就させていただくのであります。しかし更に進んで七菩提分の修行にはいります。

弁栄聖者の御詠「七覚支」の初め、択法覚支の一節に「弥陀の身色紫金にて、円光徹照し給える、端正無比の相好を、聖名を通して念おえよ、総の雑念乱想をば、排きて一向如来に、神を遷して念ずれば便わち三昧成ずべし」とお示しくございましたように、前の五根五力の救我の修行においては、いまだ必ずしも念仏するとき親様の慈悲の聖容が拝めなくてもよろしゅうございますが、この七覚支以後の度我の修行においては、必ずその心の中に慈悲の聖容を仰がなくてはなりません。しかしおっしゃるでしょう。「そりや是非ともそのように修行したいが、まだ一度も見奉つたことのない如来とは果たしていかなおかたか分からぬではないか」と。誠にごもつともであります。しかし有難いことに、古来から一心に念仏して事実生きた親

様にお遇いなされ、そのお直々の御靈育を豊かにいたただかれた多くの聖者方が、その親様の御相好をあるいは木像に、あるいは画像としてお写しおきくださって、すなわちこちらにございますような雲の上の御相好あるいは御同様に本堂または御内仏の中に御安置申しあげてあるような御相好によつて、生ける親様の聖容を偲び奉ることができません。

弁榮聖者も常々仰せられました。「如来の慈顔は初めから拝めなくともよい。ただ最初は現に真正面にましますことが信ぜられて、一心に念仏できればよい。いまだ如来を見奉れないのは、それは我々の心が穢れているからだ、一心に念仏してその罪の穢汚が滅びれば、仏や浄土が見えてくる。」と。

さて、私共が是非ともお救いに預りたい、お育てをいただきたいと願つて、たとえ短時間ずつであっても日々お画像の前で一心にお見つめ申しお慕い申しお念仏いたすようになりますと、私共には本来記憶の作用がありますから、今度はお画像を離れている時でも記憶の中に親様の慈悲の御相好をお憶いあげることができるようになります。また、このところを弁榮聖者は「お画像に向かつたら、一時間二時間首筋も痛くなるほどしつかりとお見つめ申して念仏せよ。また時々は瞑目し、しかし心はやはり親様に通わせて念仏し、復た雑念が起れば目を開けてお画像を拜せよ」と、おねんごろにお示しく下さいました。

かくのごとく、日々一心にお念仏をしておりますと、時にトロトロと眠気を覚えるようなことがあります。そのようなとき、心を一段とひき緊めてじつとお画像をお見つめ申しますと、アラアラ！これはただのお画像ではなかつたと言うように、それまでにはない不思議を感じさせていただくこともあります。または道を歩きながら、あるいは山を眺め、あるいはこんもり茂った森などを見るとき、それらの山や森全体に大慈悲の御相好を拝することもあります。

しかし、またここにきわめて大切な事柄は、「いまだたとえほのかにでも私共の心の中に慈悲の聖容をお憶いあげることができるようになつたら、それはいやしくもただの記憶だなどと思つてはならない。それがただの記憶としか思えないと言ふのは、凡夫の考えに過ぎないので「弥陀身心遍法界、影現衆生、心想中」、我々がお慕い申すその心の中に、親様は尊い靈応の御身をもつてお宿りくだされ、あたかも自然界の太陽が光線、熱線、化学線等をもつて万物を生成化育するごとく、親様は心霊界の太陽として、その御身から我々の心に尊い智慧、慈悲、威神の御光をお与えくださつて、我々の心霊を生かしお育てくださるのである。ゆえに初めはただその親様が真正面にましますことを信じて一心に念仏せよ。さすれば後には必ず心霊の眼開け如実に一切の真相を知るに至らん」と常々聖者のお示しくくださったことこれであります。

誠にここが非常に大切なところであります。もしこのみ教えを忘れずと信仰も時に流産することがあります。折角一心に念仏する心に親様が大慈悲をもつて応現してくださいまして、たまたま悪縁に遇つて、「なんだそんなものはただの記憶じゃないか」と言われる。頑是がんぜない凡夫の悲しさに、つい信仰に動揺をきたします。かくのごとくして途中で流産してしまふかたが余りにも多いのであります。ゆえに私共は御同様に活き仏の弁栄聖者のみ教えを素直にちようだいし、とにかく一心に念仏して、一時も早くそのみ恵みに浴したいものでございませぬ。

なるほど初めのうちは中々困難でありましようが、口に一心に南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と申すにつれて、心には大慈悲の聖容を念いお慕い申して念仏し、努力に努力してその親様をいつも心からお離し申さないようにいたします。そのように精進を重ねてゆきますと、ついに三昧心現前し、法眼すなわち開くとき、目のあたり生ける大慈悲の靈容みかみに接し、実に靈感きわなきを覚ゆるに至ります。もうこうなりませば、以前想像に見奉つたとは到底比較にならないほどに尊い大慈悲の親様を見奉り、信仰は金剛のごとく堅固なものとならせていただけるのであります。かくてついには七覚支の修行成就し、更に八聖道分に進むのであります。ただしその細説に至つてはまた他日を期さねばなりません。

念仏が片言でも事実が証明

ちよつと余談になりますが「在家仏教」と申します著述に「南無阿弥陀仏などと言うことは、梵語の正音より見るも無意味の片言に過ぎない。しかるにこれを称えて、やれ救済を仰ぐなどは、もつてはなはだ笑止の至りである」と言う意味のことが書いてございました。しかし私共は有難いことに事実この南無阿弥陀仏のお念仏によつて、如来様の尊いお恵みをいただくれた善導大師、法然上人あるいは弁栄聖者がたの事実によつて、少しのちゆうちよもなくお念仏いたすことができます。のみならず、如来様は眞実私共の親様であります。一切の衆生を一子のごとくおぼしめしてください、御自身の全きがごとくまた私共を如来化してやろうとなされ、そのための御活動絶え間もなくあらせられる大慈悲の御身であります。世間でも赤子が次第に成長して、もう片言でも言うようになりませば、両親はうれしくてうれしくてたまりません。目にも入りたいほどにかわいくなります。いわんや大慈大悲の親様は、たとえ不完全な片言であろうとも、いやしくも私共がお慕い申して念仏いたしますのを、いかばかりお喜びであります。ただ、お互いにその大慈悲に打ちすがつて一心に南無阿弥陀仏いたしませば、ただもうそれだけでよいわけであります。

これを要するに、光明主義とは教主積尊、善導大師、法然上人の眞の精神を現代に伝うるものであると、聖者は常々仰せられ、また「安心問答」にもその趣を記していられます。ただし従来布教に現われた浄土宗は、往々にして未来教、超自然教的であることがあります。ゆえに「安心問答」の初めのところには超自然教として浄土宗、眞宗等をその中に入れておられますが、しかしこれは決して聖者が一概に法然上人の御教えを「円具教にあらず」として排されたのではもちろんなく、今申しあげましたように「安心問答」の終りのところ等によつても、その聖者の眞意を窺うことができます。

合掌十念